2025年4月20日 イースター礼拝(復活日礼拝)メッセージ

「死を超える命」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 28章 1-10節

今日は「イースター」です。イエス・キリストが十字架の上で殺された後に、死から引き起こされたことを記念する日です。しかし、「復活」と言われることの多い、「死からの引き起こし」「立ち上がらせ」とは、具体的にはどのようなことなのでしょう。そもそも、私たちは「死」というものについて、分かっているようで、実は分かっていないことも多いのかもしれない。

人間も動物も、植物も、命を失うと、動かなくなり、そして長い時間をかけてやがて分解されて土に還っていきます。そうすると目に見える姿もなくなりますから、その存在の全てが失われて無くなってしまったように感じます。しかし、遡って考えてみると、そもそも「命」というものの自体が、どこからどのようにしてやって来るのか、ということすらも、私たちは誰も何も知り得ていないのではないのでしょうか。「命はどこから来て、どこへ行くのか」。それは大昔からの人類の問いであり、それに対してそれぞれの宗教が、「何らかの大いなる力 (Something Great)」「人間を超えた存在 (Higher Power)」「命の源なる神」など、様々な言葉で人知を超えた存在を説明して来ているのだと思います。

イエス様の「復活」、「死からの引き起こし」とは何か。そのことを、改めて聖書から聞いてみたいと思います。今回の聖書は「マタイによる福音書」28章のお話でした。同じお話は4つの福音書全てに書かれています。イエス様が十字架に架けられて、十字架の上で息を引き取られたのが、午後の3時過ぎでした。その後で仲間たちによってその遺体は十字架から降ろされて、布にくるまれて、お墓まで運ばれました。当時のお墓は山に横穴を掘ったものだったそうですが、そこに遺体を納めて、大きな石で蓋をして、そうこうしている間に、時間も過ぎたのでしょう。夕暮れ、日没が迫って来ました。ユダヤ教の暦では、日没から一日が始まると考えられていましたから、金曜日の日没から、安息日である土曜日が始まりました。すると、もう労働をすることはできませんから、イエス様の遺体をキレイにしたり、香油を塗ったり、きちんと埋葬することが出来ません。そのためにイエス様の仲間たちは、安息日の間中ずっと「早く安息日が明けないか」と待ちに待っていたのだらうと思いま

す。

28章1節には「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行つた」とあります。先程、ユダヤの暦では日没から次の日が始まると言いましたが、すると「週の初めの日の明け方」とは、「朝日が昇る頃」ではなく、むしろ「夕日が沈んで夜が始まった頃」になります。二人の女性は、夜が明けて陽が昇って明るくなるのを待つてなどいられなくて、暗い夜道を明かりを灯しながら、恐る恐るイエス様の遺体を納めたお墓までやってきました。すると、大きな地震が起きて、天使が現れて、墓を塞いでいた石を転がし、女性たちに「イエス様は死から引き起こされ、お墓の中は空であること」、そして約束通り「先にガリラヤに行っていること」を告げました。

同じお話が、他の福音書にもありますが、少しずつ書かれていることが異なっています。例えば「マルコ」では、時間帯も「朝日が昇る頃」となっていますし、見張りの番兵もいなければ、地震があったとも記されていません。イエスの復活を告げる人も、天使ではなく、一人の若者であったり、「ルカ」では二人であったり、それぞれです。一体どの福音書のお話が、実際に起こった出来事を正確に記しているのか、ということは、もちろん分かりません。と言うよりも、むしろ重要なのは、歴史的事実が正確に記述されているかどうかではなく、それぞれのお話が象徴的・文学的な表現を通して、人々に何を伝えようとしているか、ということなのだと思います。

夜中にも拘わらず二人の女性が「お墓への道を急いだ」というのは、「イエス様の死という絶望、夜の暗闇の中、時間が過ぎるのを待つ不安に耐えかねて」と理解することが出来ます。また「地震」は石の蓋が誰かによって動かされていたことへの後付けの説明でしょう。「光り輝く天使」は、夜の暗がりの中に「知らない人が確かにいた」ということや、イエス様の復活を告げられたということへの驚きや喜びを表現したのだらうと理解することもできます。そして「再びガリラヤで会える」という言葉も、そもそもガリラヤという場所が、この女性たちや他の仲間たち、イエス様自身の故郷、出身地・活動地であり、中央から見たら田舎、差別された辺境の地でありましたから、「特に注目されることなどない普段の生活の中でこそ、再びイエス様に出会える。小さく低くされている日常生活の中にこそ死から引き起こされたイエス様はおられる」ということを表しているのだと理解することが出来ます。

その後、「マタイ」では仲間たちの所に戻ろうと急ぐ女性たちの前に、復活のイエス様が現れますが、「マルコ」や「ルカ」には現れません。また「ルカ」や「ヨハネ」では異なる人物の姿で、復活のイエス様は現れた、とも記されていますから、「復活」「死からの引き起こし」というものが、単なる肉体の蘇生、止まっていた心臓が再び動き出して、倒れていた体が再び起き上がることではない、ということが分かります。

これらのお話から、現代を生きる私たちが受け取るメッセージは、「肉体の死が全ての終わりではない」ということ、たとえ深く絶望し、真っ暗闇に閉ざされたとしても、そこにも確かに光があるということ、「希望は絶望には終わらない」(ローマ5:5)ということではないでしょうか。人間としてのイエス様の肉体は、確かに十字架の上で処刑されて、動かなくなり、息を引き取りました。けれども、その命や魂、思いや志は、決して消え去りはしませんでした。今も確かに、仲間たちの中に存在し、息づき、そしてまたその一人一人を支え、活かす動力源となっています。福音書が伝える「空の墓」の物語は、そのことを表しているのだと思います。

少し、別の話をしますと、例えば、小さな子どもが母親を亡くした時、「お母さんはどこに行ったの」と周りの大人に尋ねたとしましょう。その時、「お母さんは死んだんだよ」という意味で「遠い所に行ったんだよ」と答えるのは、「本当のこと」であって、嘘ではないでしょう。では「お母さんは、お空の星になったんだよ」とか「チョウチョになったんだよ」と答えるのは、嘘でしょうか。確かに物理学や生物学など科学的に考えると、死んだ人間が宇宙の星になったり、他の生物になったりするものは、あり得ないことでしょう。ですが、それらの詩のような文学的表現が伝えているメッセージが、「あなたのお母さんは、死んだ後でも、あなたのことをいつでも空の上から見守っているよ。チョウチョになっていつでもあなたに会いに来るよ」ということであり、「あなたのことを大切に思っている母親の愛は、いつでもどこでも変わることが無い。あなたはそれだけ愛されている大切な存在だよ」というものであるならば、「お母さんは星になった。チョウチョになった」という言葉は、「本当のこと」よりも「もっと本当のこと」を表している言葉と言って良いのではないのでしょうか(ラビンドラナート・タゴール)。そして、そのような「もっと本当の言葉」は、悲しみや絶望に暮れ、倒れたり座り込んだりして動けなくなっている状態の人を、再び

立ち上がらせ、希望を与える真実の言葉になるのではないかと思います。

肉体の死は、命の終わりではありません。死を超える命、「永遠の命」があります。イエス・キリストの復活の物語は、そのことを告げています。もちろん、そのような「永遠の命」を頂いているからと言って、私たちがいわゆる「不老不死」になることも無ければ、病気も怪我も一切しなくなることもありません。この世界には今も戦争があり、貧困があり、病気も事故も、災害もあります。けれども、だからと言って、私たちに与えられた「この命には生きる意味がない、価値がない」ということにはなりません。母親の胎内に赤ん坊として形作られ、生まれる前から、神によって命が計画された一人一人です（詩編 139）。この地上での歩みを終えた後についても、私たちに計り知れない大いなる計画があるはずです。

「死を超える命」があるということ。イエス・キリストがその身をもって示した愛の神は、十字架では決して滅ぼされず、終わることはありません。命の神は、死から引き起こされ、今もこれからもずっと全ての人と共におられます。このイースターの日、「永遠の命」である神様が、共におられるという「もっと本当のこと」を胸に、私たちはこれからも生かされて参ります。